

中国にお経をもたらした鳩摩羅什

今日われわれが誦誦している仏教の經典の大部分は漢訳の仏典であるが、その漢訳の仏教を作り上げた第一人者が鳩摩羅什（三五〇〜四〇九頃、以下羅什と呼ぶ）である。

羅什はインドの貴族の血筋をひく。代々大臣を務める家柄であったが、父の鳩摩炎はその地位を捨てて出家し亀茲（きじ）国へ行く。亀茲の王は彼を迎えて国師とした。王の二才の妹を妻にし、羅什を産む。羅什を生んだあと、母は出家する。

羅什も七才のとき、母とともに出家した。師についてアビダルマ仏教を学び、偉才を発揮する。九才のとき、母に伴われて罽賓（カシミール）へ向かう。ここで羅什は国王の従

弟であり、大学者だった槃頭達多に師事するが、これはこの国最高の師であった。

やがて羅什の名声は国王の耳に達した。王は羅什を宮中に招き、外道の論師と討論させた。論師が羅什を「たかが子供だ」と軽んじたために羅什に論破されたと伝えられている。

十二才になると羅什は母とともに亀茲へ帰る。その途中、沙勒国（カシュガル）に一年ほど留まり、原始仏教などを学ぶとともに、貴重な信仰体験をもった。十三才か十四の頃、羅什は故郷の亀茲へ帰った。宗教的天才として丁寧を迎えられた。この時代、羅什は、バラモン教の聖典（四ヴェーダ）や学問（五明）を研究し天文、気象、数学などに通じ、吉凶の占いに熟達したという。そして、その行動はまじめな修行者から、破壊的であると非難されたようである。

そうした奔放な行動も次第に静まり、二十才の頃、正式に受戒して、それまでの振舞いを反省し、仏道の真摯な実践を誓うという気持になったと思われる。

やがて羅什の生涯に一大転機が訪れる。亀茲の王子で、出家して中観系大乘の大学者となった須利耶蘇摩（スーリヤソーマ）と出会い、親しくなる。彼が羅什に説いた「阿耨達經」の中に「認識世界を構成する諸要素は、みな実体をもたず、特定のすがたがない」という語があるのを質問したことから、大乘の教えの偉大さを知り、大乘仏教の究明に専心するようになった。「自分は昔、小乗を学んだが、それは、人が金を知らずに銅の鉱石をすばらしいと考えていたようなものだ」と嘆じたという。

蘇摩の導きを受けて、羅什は、「中論」や「百論」を学び、さらに「放光般若經」を得て大乘への心を固めた。羅什にとっては、寛容性と哲学性に富んだ中観系大乘仏教は「早天に慈雨」の救いとなったであろう。やがてかつての師の槃頭達多と再会した折には、師に「わたしは和上の小乗の師であり、和上はわたしの大乘の師である」と言わせるほどになったという。羅什の名は中国にまで及ぶ。

羅什が二十才の頃に母は受戒し、大乘へと転向してからインドへと旅立ったらしい。その別れの時に次のような対話が行われている。

「大乘の教えは大いに中国に広められなければなりませんし、これを伝えるのはお前の力です。しかしそのことはお前自身にとっては全く利益にはなりません。どうしますか。」

「菩薩の道はただ人のためをはかり、自分のことは忘れるものです。もしもこの偉大な教えを広めて迷える人びとを救い、悟りへ導くことができずならば、たといこの身は釜ゆでの苦しみを受けても満足です。」

羅什はこの時点において、実質的に、いわば「非僧非俗」の立場にいたのかもしれない。三八四年七月、亀茲は呂光によって陥落させられ、羅什は捕えられる。呂光は羅什を伴っ

て帰路に就いたが、途中、羅什の予言を無視して大雨に襲われ、数千の死者を出したこと
から、呂光は羅什に畏敬の念を抱くようになった。三八六年九月に涼州に到着したが、そ
の後、呂光が病没、呂纂の悪政などによって、涼の国運は衰えていく。

羅什は、涼州にあって何をしていたか。まず呂光在世の頃は、政治顧問のような立場に
あり、時折、反乱や戦争の勝敗について予言を行ない信頼を深めたい。呂纂の代にな
ると、むしろその遊び相手が主な仕事になったようで、よく碁を打ったことも伝えられて
いる。十六年にわたる涼州の生活は、仏教とはほとんど無縁であつたろう。しかしその後
の長安における精力的な訳経の状況から推測すれば、この時期に漢語の修得や梵本の整理
などの準備が進められていたことは確かであろう。

四〇一年、後秦が後涼を体制下に収めるに伴い、羅什は長安に迎えられ、国師の礼をもつ
て遇せられる。羅什は十七年ぶりに仏教伝道者として活動することになる。翌年から、僧
らの助けを借りつつ、西明閣、逍遙園において経論の訳出を始めた。こうして、まず「坐
禪三昧経」三巻、「阿弥陀経」一巻、「大品般若経」二四巻、「大智度論」一〇〇巻など
が訳出された。当時の上流知識層の「空」の思想に対する関心の強さもあり、「大品般若
経」の訳出が、羅什の名声を大いに高めた。

四〇六年、羅什は長安大寺に移って訳経を続け、「法華経」七巻、「維摩経」三巻、
「中論」四巻などを次々と訳出した。このうち、「法華経」は、のちに天台宗や日本の日
蓮宗の根本的な拠り所となり、また広く東アジアの芸術や文学に影響を与えている。

羅什の下には三千余人の訳経僧が集まったというが、彼は一面において、優れた思想家
として、また教育者として、その門から道生・僧肇・道融の仏教界の一方の中心となつて
いた廬山の慧遠などにも思想的感化を及ぼしている。われわれは、羅什を抜きにして中国
仏教を、東アジア仏教を語ることはできないのである。

長安における羅什の生活はおそらくほぼ一貫して、僧侶としての淨らかな生活ではなく、
むしろ高い地位と暖衣飽食を約束された高級官僚の生活であつた。羅什自身にはそうした
自分の生き方に対して少なくともある種の苦渋、ないし後めたさが存したことを窺うこと
ができる。

四〇九年ころ、羅什は長安で波瀾に富んだ生涯を閉じた。臨終に際し、かれは、「自分
は闇愚なのに、誤って伝訳の任に当たった。もしも私の伝えたものが間違っていなかった
ならば、私が火葬された後も、舌だけは焼けただれに残ろう」と告げた。その遺骸は逍
遙園において、外国の法に従って火葬された。薪が燃え尽き、身は灰となったが、遺言の
通り、舌だけは変わらなかった、といわれる。

玄奘二二歳の生涯と業績

一、玄奘の生い立ち

河南省陳留県の人（六〇二―六六四）で、俗性は陳、父の名は慧、その第四子。父から古典を学びながら、温かい中国知識人の家庭に育った。隋末の混乱期、陳家も家運が傾き兄の長捷法師が、玄奘を洛陽の浄土寺に連れていった。十一才で維摩経や法華経を誦す。

六一八年、兄とともに長安へ行ったが、唐朝の草創の間で兵乱あいつぎ、仏教を学ぶ講席もなく、蜀の成都へ行く。数年修業し、二十才の時（六二二）受戒して比丘僧となる。各地の学匠を尋ねようとしたが、出られず。ひそかに商人と友となり、舟で揚子江を下り荊州の天皇寺に至る。玄奘の学名はすでに聞こえており、ここで「攝大乘論」などの講義をした。さらに各地を訪れ研学を重ねた後、ようやく長安に入り、法常、僧弁の二大徳について学ぶ。毘曇、攝論、成実、俱舍など、様々な仏教哲学を学んでいた彼は、二大徳に「仏門千里の駒」と賞嘆されたが、悩みは深まる。というのは…。

三世紀のころ、インドの龍樹らによって成立した空觀を中心とした大乘仏教が、五世紀のはじめ、鳩摩羅什により中国に伝えられ盛んになった。一方、五世紀に、無着、世親により唯識の教義が宣揚され、この新大乘は六世紀に中国に伝わる。

七世紀になり玄奘の時代、種々の異説起る。玄奘は、どうしても本場のインドへ行つて、疑問を質したいと決心した。何人かの同志とインド行を上表したが、唐朝はこれを許さず、同志の人々はすべて断念したが、玄奘だけは諦めず、西域旅行の準備をすすめた。

二、西域求法の旅

六二九年、秋八月、出発、秦州から涼州へ行く。ここはシルクロードの重要な中継都市、仏教も栄えていた。一月滞在し、涅槃経や攝大乘論を講義した。しかし涼州の都督は出国禁止令を奉じ長安に帰れとせまる。幸い仏教界の領袖、惠威法師の力により西方へ赴く。それから昼は伏し夜進む難行の旅を続ける。一人でゴビ砂漠を縦断することになる。大変な苦勞をして伊吾国に辿り着く。高昌国王の要請で同国に行く。一か月余滞任して、仁王般若経を講義した。

出発に当り高昌の王は、往復二十年の費用として黄金百両他、さらに馬三十頭、人夫二十五人を支給、通訳官をつけて送った。七日間の山旅の間に十数人が死に、多くの馬が倒れた。

やがて西突厥の葉護可汗に遇され、留まることを勧められたが、初志を変えず。玄奘が高昌国王や可汗の庇護を受けたのは法師の人格や学識を物語る。同時に、当時の東西交通のメインストリートを権力者の庇護のもとに西行したことを示している。

この国に暫らく滞在した後、新しい王に道案内人と駅馬を与えられバミヤンに向った。インドに入ってから、各地の仏蹟を巡礼しつつ、ガンダーラ、ウジャナーナ、タクシャ

シラーなどの諸国を経てカシュミールに至り僧称法師のもとでは二年にわたって研学した。以上は「慈恩伝」に依るが、それは実際の旅行ルートとは必ずしも一致しない。

三、インドでの研鑽と旅行

法師は北インドから中インドへ、時に生命の危険にさらされながら、各地の仏蹟を巡礼しつつ、東進した。

カシュミールを出発した法師は、マガタ国に着く間（満三年の間）主な仏蹟を一巡した。シューラーヴァステイ国の祇園精舎、釈尊の生地カピラ城、入滅の地クシナガラ、初転法輪の地鹿野苑、維摩経が説かれたヴァイシャーリーなど。中でも玄奘の胸を打ったのは、釈尊が悟りを開いた菩提樹下の金剛座の荒廃ぶりであった。

マガタ国に着いて、インド第一の大乗教学の中心、ナーランダー寺で、「正法蔵」と尊称される大徳戒賢老師につき、五年に亘る研究生活に没頭する。

その後、東、南、西インド各地の仏蹟巡礼の旅に出る。（六三五〜六三八年ごろのこと）再びナーランダー寺に帰り、戒賢老師の命により、大乗の講義を行う。インドでも第一級の学者と認められ、大乗の徒は彼を大乘天と呼び、小乗の徒は解脱天と称讃した。

「瑜伽師地論」はじめ諸学派の教義を究めた法師は、いよいよ中国に帰って大乘の教えを広めようとしたが、東インドのクマール王から招待状が送られ、さらに戒日王から招かれ、王都の曲女城カヂヤに入った。戒日王は全インドに「諸国の学僧は曲女城に集まって、シナの大乗法師の論を聞くように」との勅を発した。かくて、十八国の王、大小二乗の仏僧三千余人、バラモン教、ジャイナ教の学者二千余人らが集まり、大法論大会が開かれた。十八日の大法論を終り帰国を願い出たが、中々帰国を許されなかった。法師の固い決意に、戒日王もクマール王もようやく出発に同意、北インドの諸国王に法師の送迎を依頼し、別れを惜しんだ。

多くの仏像や經典を携えた帰国の旅は往路以上の難行だった。ようやくガシュガルを経てクスタナ国（ホータン）に辿り着く。ここで上表文を太宗に送り、帰国の勅許を請う。太宗は沿道の諸国に送迎の便宜供与を命じ、敦煌の役人に出迎えを指令した。法師は何一つ憂えることなく一路長安に向った。六四五年正月五日、長安に通ずる運河を急ぐ一隻の船、そこに、前後十八年の旅を終えた玄奘三蔵の姿があった。

四、帰国後の活躍

玄奘が持ち帰った多くの仏像や經典を運ぶのに馬二十数頭を必要としたという。玄奘は洛陽に行き、太宗の許しを得、三月、長安に帰り、弘福寺に入って訳経を始めた。

六六四年、六十三才で没する。その翻訳部数は七十四だが、巻数は一三三八で群を抜く。（鳩摩羅什は七十三部 三八四巻）